BOOK REVIEW

しのびよる破局
—生体の悲鳴が聞こえるか

辺見庸　著／二〇〇九年
／大月書店

今年二月にNHK教育テレビで放映されたETV特集「作家・辺見庸　しのびよる破局のなかで」を加筆・再構成して書籍化したもの。経済恐慌や大量失業、戦争規模の毎年の自殺者、そして地球気候変動。こうした「危機」、「破局」は、単に経済や社会だけでなく人間の価値観の「危機」と重層的で、内面の崩壊と外部の世界の崩壊が、同時に進行していると説く。人間的なやさしさや愛の言葉をも取り込みながら、人々の（私たちの）内面を無意識に荒ませていく資本主義について語る辺見庸の、肉体と精神の深部から吐き出される言葉が心地よい。

（小村英一）

北欧 考える旅
—福祉・教育・障害者・人生

薗部英夫 著／二〇〇九年
／全国障害者問題研究会出版部

一九九三年以来六回に及ぶ北欧ツアーで感じ取ったことを、全障研（全国障害者問題研究会）事務局長の薗部英夫氏が、一五五枚の写真と軽妙なエッセーで綴った小冊子である。「ある社会がその構成員のいくらかの人々を閉め出すような場合、それは弱くもろい社会なのである」（国際障害者年行動計画：一九八〇年一月採択）の一文が想起される。「完全参加と平等」に向け、社会を前進させてきた国際社会の積み重ねの中で障害者権利条約は採択された。「人間を大切にする社会」「子どもを大切にする教育」の豊かなイメージが具体的に膨らむ好著である。

（杉浦洋一）

新自由主義の破局と決着

二宮厚美　著／二〇〇九年
／新日本出版社

本書の著者である二宮厚美さんは、長年、自ら保育運動にもかかわる研究者である。氏は、九九年刊の『現代資本主義と自由主義の暴走』で新自由主義的「構造改革」の総合的批判を行ない、〇五年刊の『憲法二五条＋九条の新福祉国家』で平和と生存権を結合する運動を提唱してきた。本書は、これまでの論戦と運動の到達、現実の展開をふまえた新自由主義への理論的・政策的決着である。これらは私たちに展望を与え、運動への励ましとなってきた。自公勢力が、「構造改革」路線の枠組みを残したまま政権の座から転げ落ちようとしている今、労働者・国民の運動のいっそうの発展が求められている。（加門憲文）